

564 中央大学記事（第三十四回卒業式・卒業生姓名・組織変更の認可・基金募集事業・維持基金払込額及び氏名）

〔『法学新報』第29巻8（333）号 大正8年8月30日〕

○中央大学記事

○第三十四回卒業式 去月六日午後二時より中央大学に於ては第三十四回卒業式を其大講堂に於て挙行したるか定刻卒業諸氏並に学生諸氏に次て来賓諸氏一同の著席するや法学博士岡野学長は拍手に迎へられて登壇是より卒業式を挙行する旨を宣して卒業証書並に褒賞を授与せられたりて先づ来賓に対し叮重なる謝辞を述べられたる後学事の報告並に卒業生に対する訓辞を述べられたるか其大要は左の如し

『本大学は明治十八年七月の創立に係り、現在は法科、経済科、商科、予科、研究科に分れ、昨年まで卒業生を出すこと七千二百九十二人の多数に上つて居ります、而して本年の卒業生は三百七十六人であつて、現在の生徒総数は四千百九十六人であり、又出身者諸氏は孰れも朝野の重要な地位を占め、それぞれ其志す所に従て国家に貢献しつつあります、高等文武官二百六十三人、司法官三百六十二人、弁護士四百八十六人、貴衆両院議員三十六人、判任官千五人、公吏三百八十人、府県道会議員五十六人、新聞記者及び著述家二百三人、会社員及び実業家千四百九十人あります洵に盛んな

る有様と謂はねはなりません、惟ふに過去三十有余年間に於て斯の如く多数の人材を輩出して国家の爲めに尽したる其功績は真に莫大であつたのであります、此の如きは独り過去現在の状態であるはかりてなく将来も益々然りてあることと信します

私の見る所に依れば各私立大学は孰れも今日は進歩発達し教育上重要な機関と爲つて居ります、於是乎、昨年公布せられたる私立大学令は、御承知の如く大学無差別、官私大学同等待遇の原則を掲ぐるに至つたのであります、是れ一は先輩諸氏か直接に此の問題に關して力を効されたるに依ることではあります、幾多の私立大学数十年の功績が、内外識者に於て之を認諒せねはならぬ勢を馴致したることを主要なる原因なりと信するのであります、去りながら私立大学の責任は、之に依つて益々重を加へたるものであります、何れの私立大学と雖も皆少くとも現状を以て満足することを許さざるは勿論大に将来の發展を策し以て益々其の面目を發揮することを務めねはなりません、我か中央大学は、創立以来の趣旨を体し、真摯の学風を興し、華を去り実に就き、教育実質の向上を図り、設備の完成を期し私饒敢て官学に遜らざるの実績を示すの覚悟を要するのであります、凡そ事は言ふに易く行ふに難きものであります、本学は幸に本学出身の學員諸君一同の熱烈なる同情と後援とに依りまして、必ずや遠からず能く大学令に拠る所の大学として、此の責任を完くするの實力を備ふに至るべきを信して疑はないのであります、

私は此の機会に於て、學員一同の高義に對して感謝の誠意を表し、併せて學員諸君か母校として本學を思ふの篤き美風を茲に御紹介するは本學の義務にして亦本學の光榮と致す所て御座います

是より例に依りまして卒業者諸君に對し一言祝辭を呈し、且告別の意を表したいと存します

諸君は三年以前本學に御入学になり、爾來勉學を積まれ其の効空からず、業成つて茲に本學を去られむとするのであります、真に諸君の爲に慶賀し且斯く多数の諸君か本學の出身者として將來社会に活動雄飛せらるるを想見致しましては、本學は之を以て無限の誇とし又至大の光榮とする次第であります、願はれは五年の久しきに亘りて、世界の風雲を攪亂したる曠古の大戦も、講和條約の成立に依りまして茲に終局を告げ、平和の歓聲、全世界到る所に鳴響いて居るのは、衷心祝福の至情を禁し得ざる所てあります、此の平和到来の時に際して此の卒業式を挙げ以て諸君の首途を祝す、洵に記念すべき卒業式であると存します、併ながら翻つて思ふに、此の戦亂の爲に曠原に曝したる死屍の累累山を爲したるもの夫れ幾許てありますか、其の濺きたる碧血は幾百幾千万斛てありませうか、其の蕩尽したる資財は幾千億の巨きに上ほつて居るてありませうか、實に、戦慄すへき慘劇と申さねはなりませぬ、斯の如く千古未だ曾て有らざる犠牲を払ひたるは言ふ迄もなく永遠恒久の平和を購はんか爲の代償てありませうかと思ひます、國際聯盟と云ひ、世界改造と云ふ論の起るのも、勞働

保護の聲の揚るのも、其の因由は此に存するのでありませう、然る以上は眞個永久の平和を確立して之を事實に顕現するにあらざれば、畢竟大戦の慘苦をして何等意義なきに了らしむるものと云はねはならぬ、併ながら世界の大勢を達觀するに、平和怡樂の黄金世界の實現果して待望するを得へきてありませうか、由來理想の實現は兎角多く期待する所に背くことは古來歴史の証する所てありまして縱令之を實現し得るものと仮想するも、前途甚た遼遠にして殆ど測知すへからざるものてはなからうかと信するのであります、現に講和會議に於て列強の巨頭たる大政治家か首を鳩めて議を凝らし、理想の實現に努力しつつある其の間に於て、錯綜せる列強の利害關係か衝突しつつありしに非ざるか、海洋自由の大旗は撤せられ、「モンロー」主義は採納せられ、人種平等問題は排せられ、而して能く將來の平和は確保せらるるてありませうか、無賠償や不併合の宣言も何時の間にやら除かれ、独國の聯盟に加はることも認められず、是れ果して世界を化して樂土とするの理想であると觀せらるるてありませうか、所謂理想の顯現列強の間に異議なくして講和會議其終を告げたものと觀察する者果して幾許ありませうか、更に各國国内の現状安逸を許すてありませうか、又國際間の經濟的利益の衝突は、各國の自保自伸の立場から見て將來更に一段の激甚を加ふるかを恐るるのであります、殊に東洋方面は既に業に世界強國の注視を怠らざる所てありまして、此の間に処して我が帝國國權の發展を図り、東洋の盟主たる天職を尽すに於ては、万遺憾な

きを期せねはならぬのである、我が帝国の地位は私の見る所を以てすれば戦前に比して一層の戒心を要するものと思ひます、更に国内に於ける諸般の問題も大に考慮せねはならぬもの多く就中経済政策に至りては特に深甚の注意を乞はねはならぬ、諸君も御承知の如く自給自足は、今次の大戦の実験に鑑みて内外識者の夙に唱道する所であります、然るに近時世上に喧しき米は如何、棉花、綿糸は如何、製造工業の基本たる鉄及石炭は如何、其他実に枚挙に遑あらずと思ふのであります、我が国に於て利源の存せざるもの、又在つても殆ど無きか如きもの夫れ果して幾許てありますか、思ふて茲に至ら如何にして国力国富の増進を謀り、以て将来の経済戦争に備ふることを得へきか、転た寒心に堪へぬ次第であります、労働問題にしましても、政治家も、学者も、資本家も、現に論議を闘はしつゝあるのであります、近来勃発する不満の聲は、一に物価騰貴に伴ふ生活難に起因するものと云ふへからざる感があります、之を要するに外交に、政治に、経済に、教育に、宗教に、将又軍事に、十分なる攻究を遂げ以て新紀元に適応する政策を樹てねはならぬ時機に遭遇して居るのであります、我が帝国の前途は一言以て之を蔽へは多事多難である、我が国民は皆帝国の地位の容易ならざるを自覚して国運の発展と、国力の充実とを図り以て世界平和の将来に貢献するの覚悟かなければならぬと思ひます、諸君は此の記念すべき時に際会して、社会に出らるる以上、常に之を念とし、率先して堅忍不拔、奮励努力、以て諸君の国家に対する責務

を尽されむことを切に希望する次第であります

終に諸君の前途を祝福し、併せて来賓各位御臨場の労に對して深く感謝する次第であります」(拍手)

右了るや須磨彌吉郎氏は法科卒業生を代表して左の答辭を

茲に第三十四回ノ卒業証書授与式ヲ挙ケラレ朝野貴紳ノ貴臨ヲ辱ウシ学長閣下ハ懇切ナル訓諭ヲ賜ハル生等ノ光榮之ニ過クルモノアランヤ

顧ルニ生等学窓ニ在ルコト三星霜常ニ外ニ銜ハス内ニ忸チス健実ナル学風ニ訓育セラレ以テ今日ノ榮譽ヲ担フヲ得タルハ偏ニ学長閣下並講師諸先生ノ懇篤ナル指導薰陶ニ拠ル所ニシテ感謝ノ念能ク言辞ノ悉クス所ニ非ス生等母校ヲ出テ之ヨリ就カント欲スル所ハ素ヨリ同シカラスト雖モ銳意精勵以テ高恩ノ万一二酬井ンコトテ期スルハ則チ一ナリ而シテ社会ノ前途ハ実ニ巨嶽深淵雲阻ミ波遮ラントス学浅ク才疎ナル生等危懼セサラムトスルモ得ヘカラサルナリ

過去五年ニ巨ル戦禍ハ辛ニ熄ミテ平和ノ曙光ヲ見ルコトヲ得タリト雖モ輕佻漸ク風ヲ成シ錯綜ノ思想ハ滔滔トシテ瀾漫ス当ニ邦家百年ノ大計ヲ樹ツヘキノ秋ニ際リ法律ヲ適正ニ応用シテ社会ノ進展ニ資スルハ最モ喫緊ノ事ニ属ス生等白面ノ書生素ヨリ貢献スル能ハサルヘシト雖モ其學習スル所ヲ睨メテ倦マスンハ能ク滄海ノ一粟タルヲ得ヘキヲ信ス然レトモ法学ハ深遠高尚一朝一夕ニシテ究メ得ヘキモノニアラス冀クハ諸先生自今以後陪旧ノ教ヲ永劫ニ垂レラレンコトヲ  
法科卒業生一同ニ代リ一片微衷ヲ陳ヘテ答辭ト為ス

大正八年七月六日 法科卒業生総代 須磨彌吉郎

又山田市郎氏は経済科卒業生を代表して左の答辞を

吾中央大学ハ本日ヲトシ生等ノ為メニ卒業証書授与ノ盛典ヲ  
挙ケラレ朝野貴紳ノ貴臨ヲ辱ウシ学長閣下ヨリ懇篤ナル訓辞  
ヲ賜フ光榮何者カ之ニ加ヘン顧ミレハ生等既ニ幾星霜此ノ著  
実ナル校風ニ薰シ学長閣下並ニ教授各位ノ指導ニ浴シ茲ニ始  
メテ今日ノ榮誉ヲ荷フコトヲ得タリ感激措ク所ヲ知ラス惟フ  
ニ榮誉ノ存スル所ハ即チ責務ノ存スル所ナリ今ヤ世界和平ノ  
議新ニ成リ劍戟ノ響ハ漸ク当ニ終熄スヘシト雖モ内外經濟上  
ノ戦ハ是ヨリ以往益々其熾烈ヲ加ヘ来ラントス斯界ノ前途豈  
ニ多事ナラストセンヤ生等此秋ニ方リ篤鈍ヲ以テ社会ニ出ツ  
誠ニ一喜一憂ヲ禁スル能ハサルモノアリ然リト雖モ平生ノ教  
誡ハ言言句句深ク銘シテ生等カ肝ニ在リ庶幾クハ以テ唯一ノ  
信条ト頼ミ夙夜励精聊カ帝国ノ進運ニ貢献シ以テ本日ノ榮誉  
ヲ失墜セサランコトヲ期ス

大正八年七月六日 経済科卒業生総代 山田市郎

又吉田義雄氏は商科卒業生を代表して左の答辞を朗読せらる

本日爰ニ吾中央大学第三十四回卒業証書授与ノ典ヲ举行セラ  
ルルニ方リ貴顯ノ貴臨ヲ辱ウシ殊ニ学長閣下ノ訓辞ヲ拝ス生  
等ノ光榮大ナリト謂フヘシ  
抑生等ノ今日アル一ニ是レ諸先生薫陶ノ厚キニ職由スルモノ  
ニシテ其鴻恩何ヲ以テカ之ニ酬井ン思フニ今ヤ歐洲ノ戦乱既  
ニ局ヲ結ヒ和議漸ク整フ此時ニ当リ列強各經濟上ノ創痍ヲ癒  
ヤサントシ拳ツテ東洋ニ矚目シ世界經濟上ノ枢機ハ將ニ我

ヲ中心トシテ其回轉ヲ開始セントス從テ我実業界ハ振古未會  
有ノ難局ニシテ前途茫茫幾多ノ困扼アルヲ自覺セスンハアル  
ヘカラス而シテ是レ實ニ生等カ將ニ母校ヲ辞シテ趨カントス  
ル所ナリトス然リト雖モ生等カ国家ニ対シ報効ノ誠ヲ致シ諸  
先生恩誼ノ万一ニ報スル所以ノモノハ亦一ニ此多事ナル活動  
場裡ニ於テセサルヘカラス生等不敏ト雖モ幸ニ先進各位ノ教  
戒補導ニ頼リ希クハ臆勉事ニ從ヒ百折不撓以テ各自ノ天分ニ  
応シ微衷ヲ邦家ノ為メニ尽サンコトヲ是レ生等ノ抱負ナリ  
今ヤ生等多年親ミ来レル母校並ニ諸先生ト別ルルニ際シ愛慕  
ノ情轉タ禁スル能ハサルモノアリ

聊カ所思ヲ披瀝シテ答辞ト為ス

大正八年七月六日 中央大学商科卒業生総代 吉田義雄

斯くて来賓元田肇氏は左の祝辞を述べられ

『学長、来賓諸君並に卒業生其他の諸君、中央大学第三十四  
回の卒業式を举行せらるるに当りまして、茲に諸君の前に祝  
辞を述べますことは、洵に私の光榮とする所でございます  
顧みますれば本校の創始せられましたのは明治十八年と記憶  
致します、真に其当時は微微たるものでありました、吾吾の  
如きも其世話人の末班に連つて居つたのを見ても如何に微微  
たるものであるかは推知せらるるであらうと思ひます、爾来  
今日に至るまで約三十年の星霜を経まして今日の盛大を致す  
と云ふことになりましたのは、当局理事者の御尽瘁の結果、  
講師各位の叮嚀なる御薫陶並に學員諸君の学校を出て堅実な  
る思想を有し、奮闘努力せられたのか天下に認められて此に

至つたと存するのであります、私は多少關係を有つて居る本校の為に祝意を表し、併せて國家の為に大慶を絶叫せむと欲する次第であります

当学長閣下、或は現在の理事者諸君、講師諸君の非常なる御尽力に依つて此盛大なる卒業式を見るに至つたのでありますから其勞は謝さなければならぬ、尚ほ将来に於て更に更なる發展をすることに付て学長理事者の御高配に悖らぬやうになることは確信して疑はないのであります、それ故に是等の諸君に対して謝意を表することは大事でありますけれども、此際私の念頭に喚起しますのは歴代の学長或は講師、就中今は故人となりました所の菊池、奥田の両君並に岡村旧学長、是等の諸先輩が非常に努力をせられて、中央大学の今日の盛大を致すに与られたと云ふことは、吾吾は決して忘れてはならぬことと存します、更に私は、より以上忘れてはならぬと思ひますことは、本校を卒業せられた所の學員諸君である、今日は全世界の風潮と申ませうか、国内の風潮と申ませうか、輕躁浮華に流れ、口には剛健を唱へるか行ひは一向之に副はぬ、随分世間の人から爪弾きされるものが、多少學識を備へた者にも無きにしもあらずであります、單り本校の誇とする、他の学校に対しては甚だ恐縮でありますけれども、本校の誇りとする本校特有の美風と云ふものは眞摯にして堅実なる思想を懷いて、努力奮闘止まぬと云ふことである、是か為に世の中では本校の學生を非常に信じ、其信するの余として本校か今日の盛大を來したものであらうと思ふ、

是れ勿論学長、理事の御尽力、教師の薰陶から出たには違ひない併しそれは出た學生か詰らぬ行為を執つたならば何にもならぬのでありますか、其出た所の學員諸君の美風か即ち今日の盛大を來した大なる結果であると云ふことを私は信して疑はないのであります、此点に於て學員諸君の是までの堅実なる行動に対して敬意を表し、進んで國家の為に感謝の意を表して然るべきことと存します、それで今日のお目出度いと云ふこと、並に学校の盛んになつたことに対する祝意は以上申述べただけで尽きて居ることと存しますが、更に今日卒業の諸君に対して満腔の誠意を捧げて祝意を表すると同時に、聊か一言を呈したいと存するのであります、実は先輩の博學なる諸先生も來賓の中には多多いらつしやるし、又識見家も沢山お出になる所に於て、私か諸君に一言を呈すると云ふことは諸君の冷笑を招くかも知れませぬけれども、私は満腔の誠意を捧げて自己の信する所を諸君に訴へて見たいと思ふ、それは大局の上から今日の時勢を申上けることは学長より既に御訓示になりました、故に私は之に蛇足を添へるの必要はないと存します、私は眞に平凡なる者であるから平凡なる事柄を諸君の前に呈して見たいと思ひます、勿論学界からも遠さかつて居る私のことであるから或は間違つて居るか知れぬか、私だけは自ら間違つて居らぬと確信して居る、それで今日の卒業生中には法学の方か多うからうと思ふが、經濟、商業何れに向つても御参考に供したいと思ふのであります、甚だ平凡な御話でありますかどうか将来とも法律を學はれた御

方には、法律と云ふものは吾吾の社会に立つ所の行動を律するものには違ひありません。是は決して最善の道義でないこと云ふことを先づ以て御注意ありたく存するのであります。法律を犯さなければ罪にならぬと云ふのは、罪になります。たけのものを挙げたのであつて、之を以て人の行動を律したる最善の道義ではない、道義なるものは其以上に超越したる一種の行動かなければならぬと云ふことを私は第一に望む、殊に近來世間の思想界の潮流は滔滔として止まる所を知らぬ、如何なる学理原則から出て来て居るか存しませぬけれども、私の眼から見れば輕燥浮華殆ど我國<sup>(建)</sup>国以来の大道を没却せむとするやうな行動をして、思想界か動きつつありはせぬかと思ふ、法律か定まつて居るから法律に背かなければ宜いてはないかと云ふ、左様な理屈は西洋には流行るか知りませぬが、我建国以来の大道は斯様なものではない、免れて恥なしと云ふことを孔子が言つて居る、孔子のことを説くとまた元田が、頑固な男だから、新知識かないからあんな事を言ひ出したと言はれるかも知れぬが、免れて恥なしと云ふやうなことがあつたならば殆ど道義は廢つて仕舞<sup>(舞)</sup>ふ、蓋亡国は是より生ずるものであらうと思ふ、即ち法律以上に超越した道義と云ふものを以て世界に立たなければならぬと云ふことを飽く迄も觀念せられむことを、法律を學んだ御方に望むと云ふ意味は茲に在るのであります

更に法律に付て御話をする、近來沢山の法は設けてあるか、此法を執る人も、社会の法に対する人の觀念も、一向法律の

神聖、威嚴と云ふものを認めて居らぬ、何かと言へば此法は悪い、時勢に適當しない、何とか斯とか理窟を置いてからに、国家か制定した法律を国民か尊敬しない、それでは法律の威嚴も威信も無くなつて仕舞ふのでありますから、私は苟も国か法律を設けたならば、之を廢止するまでは嚴に其神聖を保ち、威嚴を保たせると云ふことか、国民の当然守るべき点であること云ふことを信するのであります、例を挙げると色々な事かあるから困るやうなことであります、極小さい例を挙げて申しますと、私は古い時代に中央大学に參つて詰らぬ講□をしたり、又今でも嘲弄される呼物になつて居るものもあります、然るに何故其講師を罷めたかと云ふと、政黨員たる者は講師たることを得ず、斯う云ふ国家の規則か定つた、又学生と云ふものは政談演説を聴くことか出来ぬと云ふことが文部省の規定になつて居ると私は思ふ、然るに今日はどうかであるかと言へば、事実の上にて是等の制度規則は精神的に蹂躪されて仕舞つて居るのであります、既に蹂躪される位のものならば無いが宜い、有るならば嚴として之を行つて威嚴、神聖を保たしめなければならぬと私は思ふのであります、私は執法官も人民も法を愚弄すると云ふやうになりましたならば、国家は闇であると云ふことを信する、どうか法を執る者も其法には束縛される、其法律の下に行動する人民であるから、何所までも法の神聖、威嚴を存して行くと云ふ精神を保ちたい、諸君の中には法を制定すると云ふ方面に立つ御方もあるてありませう、どうか是等の御方に向つて私の望みま

すのは先刻も申上げました通りに常に道義の觀念と云ふものを第一にして、經濟事情其他百般の事を参酌して法律を立てられるものでありませうけれども、道義の觀念と云ふことだけは常に念頭に置いて法務に従事されるやうにありたい、斯う私は思ふのであります、左様な事はお前か言はなくても皆知つて居る、平凡な話たと云ふ御考があるかも知れぬが、平凡な話でも今日の実況かさうなつて居るのを遺憾とする、それ故に平凡な事柄に尚ほ一層の注意を仰きたいと云ふことを述べる次第であります

經濟家、商業家に於きましても今申したことに御参考になる事柄があります、今日の時勢に於て、平和は克復致しました、講和条約の調印は出来ましたが、此後はどうなるか分らない、東洋の風雲は一層急を告げて居る、是もどうなるか分りませぬが、此場合に當つて縱令戦争は東洋西洋共に其痕跡を断つに致しましても、經濟界の競争は益々激甚を極めることであらうと思ひますから、商業經濟等に従事される御方は一層の奮闘努力を要する、併し其奮闘努力の精神を成す所は、法律に従ふのは勿論の話であるが、其法律に超越した道義と云ふ觀念をお忘れなさらぬことを私は切に希望致します

尚ほ私の一言を呈したいと思ひますことは、歐羅巴の大戦の影響と致しまして、御承知の通りに西洋では耶蘇教の宗教道徳か立国の根本を成して居つたのでございますか、これか総て破壊せられた、所謂文明と云つて居つた所の物質文明、機械工業、是等か悉く道義を破壊する手段に用ゐられたのか今

回の戦争であります、其波動と致しまして露西亞は潰れて仕舞ひ、今日潰乱の状態にある、或は洪牙利であるとかあの辺の国国には新しく出来た国もあり滅びた国もありますが、また国としての十分な基礎か立つて居らぬ、如何なる動搖を来すか分らぬやうな有様であります、此波動に伴つて思想界の潮流と云ふものか非常□変化を来したと云ふことは皆様御承知の通りであります、此変化を来した思想界の潮流か、世界の一帝国である我帝国にも影響せむとしつつあると思ひます、少しく露骨に言つて見たくもあるけれども是は控えます、政談や議会のやうになるといけませんから差控えますけれども、何しろこれ迄官僚の養成所と認められた学校か今日は過激派の養成所ではないかと云ふ心配も時時人の意見を聴いて見ると無いでもないやうな激変を日本に來しつゝあることを眼前に見つゝあるのであります、此際に於て私は特に希望する我帝国臣民は、二千五百年間も世界の潮流に立つて、良い事は取り悪い事は排斥して、巍然として東海に立つて、遂に今日では五大国の一に連つて世界の会合其他の事を協議すると云ふ地位になつたのでありますから、どうぞ此世界全体の波瀾極りなき所の、昨日の事は今日變ると云ふやうな激變を告げて居る思想界の潮流に耽溺しないやうに我帝国の臣民はありたいと思ふ、是に於て想ひ起しますのは、我東洋の一大名山たる富士山である、箱根であるとか、足柄山であるとか、駿州甲州、四囲の山は暴風雨、若くは雷か鳴つて夕立かして真暗になつて居る中に、巍然として雲表に超越して、奇麗

な朝日か輝いて居ると云ふのか即ち富士山である、千古の名山であると云ふのは是か為めてあらうと存します、我帝国臣民も世界の暴風雨、思想界の変動があらうとも堅実なる思想を懐いて、恰も富士山か箱根山其他連山の暴風雨の中に屹立して、依然として朝日か輝いて居ると云ふ態度を維持して立つて行くと云ふことを切に冀ふ、国民に之を冀ふのであります、ここで国民に望むと申すのは、諸君に望む前提に申す、中央大学の学風は世間の浮華軽躁の言動に依らずして、堅実なる美風を懐いて今日まで天下に信用を得て居る、此成績を益々發揮致しまして、諸君の力に依つて、諸君か帝国七千万臣民の指導者となつて、恰も世界に対しては日本帝国か、富士山の諸山に於けるか如く、我帝国に於ては中央大学の學員諸君か富士山の諸山に於けるか如き有様を以て国民を指導せられたならば、実に前途容易ならぬことありますけれども世界に冠絶した事も出来やうと思ひますから、さうして日本帝国の前途を樹立して行くと云ふことにありたいと存するのてあります

取とめて何と云ふこともございませぬ、固より識見も有つて居りませぬから申すことも出来ませぬか、以上本校三十四回の卒業式を祝し、併せて是より学校を出て奮闘場裡にお入りになると云ふ卒業生諸君に対する祝辞の代りに一言を呈した次第であります』(拍手)

次に日本興業銀行総裁土方久徴氏は左の祝辞を

『学長、来賓並卒業生及び学生諸君、過日学長より本日の目

出度の卒業式に罷出て何か御話を申上げるやうにと云ふ御命令でございました、生来甚た不弁な者でございました一向さう云ふことには慣れませぬでございますが、御校の卒業生諸君の中には経済或は商業の方の学科を専門に御修めになつた御方もおありになると云ふことを承知致しまして、何か御参考になることがあつたならば、併せて申上げたいと存しまして、御請を致しましたやうな次第でございます

段段学長の御訓辞、或は唯今元田閣下から最も明快なる、且懇切なる御話かございました。此古今未曾有の大戦争の終結に際しまして、此学校をお離れになる卒業生諸君の為に、真に目出度い一新紀元を造つたと云ふことは、既に皆様の御話に在つた通りでございます、それと同時に社会にお出になりますに□ては頗る多忙であると共に、諸君の御注意なさらねはならぬ事か沢山あるやうに自分も考へますから、其一端を申上げて見たいと思ふのでございます

大戦の齎した影響は実に多方面でございます、唯今元田閣下の御話になりました通り、先月二十八日を以て条約の調印は済みましたから、一先つ干戈の事は今後無いことにならうと思ひます、茲に一応人類の安寧幸福が保持されると云ふことの結果になりましたことは真に結構なことでありますが、此大戦争か国家社会の各方面に及ぼした影響と云ふものは非常に重大であります、政治外交の方面に於きましては申す迄もございませぬ、又各国の財政経済上に及ぼしました影響並に変化と云ふものは、過去に於ても重大であり、今後亦測る



へからざるものかあらうと存します、其他學問上に於きまして、宗教、教育、或は唯今御話がありました通思想の方面に於きましては、今後著しい變化を招くことと私は信じて居ります、我國は幸に戰地を離れますことか非常に遠くあります、□直接の影響は大したことでありませぬが、唯今申すやうに世界を挙げて干戈に従事しました結果でありますから、其影響を被ることも、歐洲或は米國の如き直接に戦ひました交戦諸國の夫れとは程度も違ひませうと存しますが、矢張り其影響は直接、間接に受けて居ります、其影響の中には自動的のものもあり又他動的のものもありまして、今後之に対して我朝野か施設經營して行くべき事柄は、範圍か頗る広汎であらうと存します、而も其種類は多岐多様に亘ることと存します、私の浅学不才を以てして広い範圍に亘り諸君に評論を申上げる訳には参りませぬが、兎に角此多岐多様、且範圍の廣大なる方面に諸種の經營施設をしなければならぬと致しましたならば、所謂國を挙げて絶大なる注意、努力を以て之に当らなければならぬことと信するのでございます、斯る時に當りまして諸君か學窓を離れて社會にお出になることは、一面に於ては眞に慶賀に堪へぬ次第でございます、或は直に活社會にお立ちになるお方もございませうし、尚ほ進んで學術を研究せらるるお方もございませう、何れに致しましても諸君の御活動になります範圍は、従来に比して一層領域か拡大されたものと存します。さう致しますと所謂諸君の御活動の範圍か拡まりました文それだけ、諸君の前途は多望多幸と言は

なければならぬのでございます、併ながら又一面には頗る多事であらうと云ふことは予て御覺悟になる必要かあらうと存します  
 戦争の影響は各般に亘りますが、一番顯著なるものは何かと申上げますれば、此戦争を続けさせた經濟、財政方面の影響か頗る重大であります、此戦争四年間に交戦諸國はどう云ふ事をしたかと申しますれば、殆ど財政上並に經濟上に於ける総ての活動を戦争の方面に使ひ果して仕舞ふたのでございます、殆ど有ゆる富と力とを傾けまして、其生産を総て軍事的生産に傾注して仕舞つたのでございます、甚だ乾燥てはあります、口では三五百億と申しますけれども、実に巨額なものに使ひました金額は約三五百三十億余円になつて居ります、口では三五百億と申しますけれども、実に巨額なものでございます、而して吾吾と同じ側に立つて働きました聯合國の消費しましたのは二千五百二十億に達し、敵國側の消費しました高は約一千十億円に達して居ります、斯う云ふ数字から考へて見ましても、如何に甚しい影響を交戦諸國の財政經濟上に与へたかと云ふことを略々推測することか出来やうと存します、併し此金は単に地中に埋没して仕舞つたものとは違ひます、即ち此戦争を中心として生産か行はれたのであります、之に伴ふ産業は著しい勃興をして居ります、試みに米國の例を取つて申上げますと、米國は一昨年四月に参戦致しましたけれども、其以前には中立國でございました、従つて交戦諸國の総てに物資を供給し軍器を供給すると云ふ側

に立つて居りまして、御承知の如く土地は膨大でありますし資源も強大でありますから、其供給力の偉大なる為、彼等が交戦国に供給しました高は非常なる額に上りました、戦前の統計に依りますと、戦争の始まりました前年の輸出入貿易は八十四億三千四百万円でありました、昨年之を見ますと百八十三億、約百億円以上の増加になつて居ります。是はほんの一端の数字でありますが、又以て如何に供給力が盛んであつたか分るのでございます、御承知の通り米国と云ふ国は従来は非常な借金国でございました、土地が広大で為すへき仕事か非常に多いので、常に資本の欠乏を訴へて、欧羅巴諸国から借金をして資源を開発して居つたのであります、其借金が戦前には八十億円ございました、然るに戦時中に約四分の三を返して仕舞つて、今現に残つて居る彼の対外債務は二十億円位になつて居ります、所か今申上げました□<sup>(通)</sup>り一般に物資及軍器を供給し、後には自分か参戦して、自分の国の軍資を支へながら仲間の交戦国に供給を致しました、さうして交戦国は米国から借金をし、物資を得たのであります、其高か二百二十億円と云ふ高に達して居ります、斯の如くして見ますれば戦争前に有つて居つた八十億の借金が戦争の爲二十億に減り、尚ほ亜米利加か聯合國に有つて居る債権か二百二十億でありますから、差引二百億円の債権を聯合各国に対して有つて居る訳でございます、其力は実に偉大なものであらうと思ふ、それは今日に止つたことではありませぬ、今後年年歳歳、彼は債権を殖して行くに相違ない、米国か参戦以

来、一日に使ひました金額を試みに申上げて見ますと、一日平均六千六百九十五万円つづ使つて居ります、さうして彼は中途から参戦を致した<sup>つた</sup>から比較的、他の列強に比へますれば戦費の使ひ方が少ないやうでもあります、それでも全部では三百九十一億円と云ふ数字に上ほつて居ります、而して同国の富はどうなつて居るか申しますと三千六百六十億余円と云ふことに今日は算定されて居ります、之に今申上げた二百億円の貸金を加へますと、彼は今後に於て働かすへき資金を非常に多く有つて居ると言はなければならぬのであります、是は米国のことでございますが、英吉利、仏蘭西かあれたけの大戦に、非常な苦心耐久をして今日の光榮ある勝利を得たに付てどの位の金を使つたかと申しますと、英国は八百五十三億余円使つて居る、仏蘭西は五百六十一億余円の戦費を使つて居ります、而して英国の富は今日では二千五百七十八億円と云ふことに算定され、仏国は百九十六億余円と云ふことに算定されて居ります、而して彼等か今度の戦争に依つて被りました創傷を恢復するのは余ほどのことであらうと存します、御承知の通り兌換は総て中止して居ります、普仏戦争の時も仏国の兌換を中止致しましたか、それか本当に恢復せられたのには数十年を要して居ります、彼等か今後兌換を恢復し、世界市場として従来の名声を恢復するには先づ以て此借金を返して仕舞はなければならぬ、それには非常な努力を要する次第であらうと存します、そこで此上に、段段先程から先輩の御話のあります通り経済戦争に世界を挙げて従

事しなければならぬ、是か頗る激甚を極めませうと存します、彼等もどうかして此瘡を早く癒したいと云ふことに付ては有ゆる手段方法を用ゐるたらうと存します、或は関稅戰爭も盛に起ることたらうと思ひます、從來長い間自由貿易を唱へて居りました英国も、必ずや今後は是のみに安んじて居ることは出来なからうと思ひます、今後非常なる関稅戰爭か勃発するたらうと云ふことは略々私共は期待し得ると思ふのであります

それならば我国は此戰爭から、經濟的にどう云ふ影響を受けたかと云ふことを、ほんの一端だけを申上げて見ますと、先程も申上た通り戰地を遠く離れて居りました為に諸種の生産の分配、消費等には便宜を有つて居ります、従つて産業の發達は可なり著しいのでございます、勿論国が小さいのでございますから中亞米利加のやうには参りませぬ、而も尚ほ貿易の一端を申上げて見ても、十三億五千万円であつたものが戰時中は三十六億三千万円に進んで居ります、各種の事業に投じた資本は戰時中に二十六億二千五百万円だけ殖えて居ります、是れ皆世界の各国に軍需品を供給しました結果此に至つたのでございます、或は貿易以外の諸種の取引勘定から斯る巨額のものを獲得し得たのでございます

斯う云ふことになりました為に実業界では非常に人材の要求が多くなりました、或時は人が足りませぬで各方面で非常に困つた次第でございます、それで今後どうなるかと申しますと、戦時の中に行つた事業の整理等も当然行はれやうと思ひ

ます、けれども確かに是だけの富を獲得したのでありますから、国としては今日何所までも之を維持して進めて行かなければならぬ運命に立つて居ります、故に将来当然に期待される世界の經濟戰爭に堪へるか為めには、其準備を怠ることを許さぬのである、でありますから諸種の事業の整理が行はれ、人の淘汰と云ふことも勿論行はれて参りませうと存しますけれども、尚ほ実業界に於て人材を要することは此趨勢を続けて行くものと私は考へて居ります然らば彼等はどうか云ふ方面にどう云ふものを求めるかと云ふことを申上げて見ますと、畢竟彼等は、彼等の能率を増進すると云ふことに全力を注いで行くのでございます、其為にはどうしても實力を蓄積して居る<sup>(る)</sup>人を欲しいと云ふことになるのであります、故に自分は学士である、自分は何所何所の学校の専門科を□卒した者である<sup>(る)</sup>と云ふだけでは、中容易に彼等に入れませぬ、それ故に若し、学士なるか故に斯く待遇せよ、斯く優遇せよと云ふやうなことで実業方面に入つて参りましたならば、恐らくは失望に終るたらうと思ひます、実業界に於ては實力のある者を欲しいと云ふことを申しますが、それは一体どう云ふことかと云ふと、甚だ平易なことでありますから御参考に申上げて見たいと存します、それは一言にして尽きるのではありません、どうもあの人は底力のある人である、而して頗る誠意のある人である、又仕事をしては勤勉である、是だけありますならば實力が備はつたと云ふことか言へるのであります、勿論是は誰にも言ふことでありませぬ、即ち高等教育を受けた人で

さう云ふ力を備へて居る、又さう云ふ行動を執らるる方は実力のある者と吾吾の方では申して居る、言葉を換へて申しますれば高等教育の上に常識の発達に始終心掛けて居らなければならぬと云ふことであります、それから事に執掌して最も熱心でなければならぬと云ふことは申す迄もありません、併ながら実業方面の事は中一朝にして修得し得られるものではないのであります、どうしても堅実に多少持久と云ふことを考へて居らなければならぬ□さう云ふ風になりましたならば何時の間にやら実力か充実致しまして其力か外に現はれすには居りませぬ、従つて上下の信頼は招かすして此御方に集まるのであります、私は既に二十四五年間実業に従事して居ります□甚だ経験は乏しいのでございますかよく私にお問ひになる方があります自<sup>(分)</sup>□は是れ是れの会社なり銀行なり其他の実業方面なりに従事してから余ほど勤勉にやつて居る積りである、けれどもどうもまだ自分を認めて呉れない□思つた通りに出世も出来ない、どう云ふものであらうか、何か□間に欠点でもあるのであらうかと云ふ御尋ねを蒙ります、私かいつも之に向つて申上けますのは、あなたは私の後に附いて居る後光を御承知でありますか、後光は私自身も知つて居らないであらうと思ひます、自分の周囲に一種の雰囲気をお附けになることに御注意にならなければいくまいと考へる、其雰囲気は何であると云ふ御尋ねがありましたなら、それは所謂勇猛精<sup>(進)</sup>□努力と云ふことより外にない、是は諸君には見えすに他人に見えなければならぬものである、自分が大変勉強

して居る努力して居ると云ふことは努力の足りない証拠である、人か見て始めて努力と云ふことを許して呉れなければ□其人の努力は決して徹底した努力ではなかつたと言ふの外はないのであらうと存じます、今回目出度く御卒業になりました御方の中にも実業方面に御従事になる方もあらうと存じますが、此雰囲気を造くる<sup>(つゞ)</sup>云ふことか成功の要訣であると云ふことだけを御記憶にならむことを望むのでございます序なからもう一つ申上げて置きたいのは、近來いつからか成金と云ふ言葉が日本に出来ました、日露戦役の頃からあります、経済状態の変遷の激しい時代に乘して巨額の利益を獲得したものを成金成金と云つて居る、此成金と云ふものは私一個の考へとして決して排斥すべきものでない、成金の発生と云ふことは或意味に於ては寧ろ歓迎しなければならぬと存じます、詳しく申上けますと時を重ねますから省きますが兎に角一部の異常なる成功者を成金と云ふて世間から嫉視せられて居る傾きもありますが、一面からは□如何にせは彼等の如くなれるかと憧憬せられる向きも世の中にはあるやうに存じます、殊に是か若いお方の血を沸かさせるやつと存じます、勿論堅実なる学風に依つて訓育を受けられた諸君に向つて斯ることを申上ける必要はありませんが兎に角世の中には斯く云ふものを自分の理想として成功の的として成つて見たいと云ふ念慮の人か中々にあることは事実でございます、故に若い卒業生諸君の中には□或はさう云ふ所に行つて見たならば忽ち出世か出来る金を得られるとともに相当な地位に進

んで心持よく仕事をやつて行くことか出来はせぬかと云ふやうな考を有たれぬとも限らない、現に従来従事して居つた仕事を捨てて之に走つた人も私の耳目に触れて居ります、併し其結果はどうであつたかと云ふことは今日之を速断することは出来ませぬが、既に其早計、失策であつたと云ふことを悔んで居らるる方があります、是れ畢竟先刻申した本當の精進心、努力心から出たのでなく一時の原因を捕へて之を利なりとして走つた結果であらうと思ふのでございます、勿論さう云ふ所に出てられて非常に成功をし又従つて國の爲になることも沢山ございます是は其人の資性にも依ることでございます、して一概に評し去つて仕舞ふことは出来ないと存しますが、大体実業方面のことは或は外交、或は政治、其他の方面の事柄と違ひまして外に現はれる如く決して花□しいものではないのでございます、それでありませうから先程も申上げたやうに何所までも堅実に持久をすることを専念に考へるより外に途はないのでございます、故に吾吾実業界に居ります者が、お前達は如何なる者を要求するかと云ふ御尋を受けました場合に何時でも申上げますことは、其資格の第一は思想の堅実と云ふこと、それから或事柄に対して相當の考を附ける、さうして其考を容易に動かさない、所謂定見を把持する、さうかと云つて徒に狷介にして他と容れぬと云ふやうなことがあつては、物は皆片端から打壊されます、他との融和を欠くやうなことがあつてはならぬと云ふことが一番緊要な資格ではあるまいかと申上げて居るのでございます、尚ほ又先刻も御

話のありました通り世界戦争の結果一般思想界に非常な變化を来した□或方面には險惡の風潮かございます、是は社会政策上先輩有識の御方か非常に心配になつて居ることと存しますが、殊に実業界にも多少此風のあるのを甚だ遺憾ながら申上げざるを得ないのでございます、実業従事者の中にも兎角「デモクラシー」の穿き違へかある是は特に相与に戒めて行かなければならぬ点でございますから常に注意を怠らないのでございます、諸君の中に実業方面にお出になる御方は□特に此点に御留意願ひまして、実業界の惡風潮を何所までも退治して仕舞ふと云ふことに共に御尽力を願ひたいと存して居ります

余り長くなりますか要するに此世界改造の新時期に遭遇致しまして、諸君は目出度く此学窓を離れられることになりました、今後社□に□つてそれぞれ御活動になることと存しますので□前途洋洋たる多望の道程にお□ほりになる次第でございます、併し又先程から先輩の御話もありました通り頗る多事であります、頗る複雑を極めることと存します、従つて精神的にも物質的にも幾多の辛酸を経られることと失礼ながら存します、故に先刻申上げますやうに何れの方面に向つても堅実なる思想を一層御修練になり□穩健なる常識を益々御発達になりまして、さうして専念不斷の努力をお積みになりましたならば、実社会に□お出になつて必ず優勝者たる地位にお立ちになることを堅く信するのでございます□鉄の戦争は變して今後は金の戦争になります、特に此際に當つて実業方

面にお出でになる御方は此事を御銘記あらむことを希望致します

私は先程御紹介を□<sup>(受)</sup>けました通り実業方面に居ります為に兎角話か一方に偏します、此点は御容赦を願ひます、単に多数諸君の中には此方面に向はれる御方かあらうと存しまして、其御参考の爲にもと所感の一端を述べたに過ぎないのでございます、重ねて目出度き諸君の御首途を祝福致し又長く御清聴を煩はしたことを感謝致します(拍手)

又法学博士青山衆司氏は講師を代表して左の祝辞を

『学長より、本日卒業生諸君に向つて御祝辞を述べたる役を勤めよといふので、御断りの出来ない命令でありますから一言申し上げます

卒業生諸君は今日真に名誉なる卒業証書を受領せられることに爲りました、定めし諸君等の御悦ひは大なるものであると思ひます、諸君の御父兄に於きましても亦御悦びてあらうと存します、続いて吾吾に於きましても非常な満足を以て諸君を送るのであります

諸君は今日を限りとして此校門から出られる訳になつて居ります、諸君の前途には赫灼たる光明が見え切つて居ると云ふことを考へられるのであります、諸君は従来学得せられ、修□せられた所の利器を持つて居る、其利器を真向に振翳して各々望まれる所の途に赴かれるのでありませう、諸君か御自身の運命を将来に向つて開拓する意味に於て、さうして又諸君等か多年撫育を受けて居られました国家に向つて其恩を報

せむか為に出られるのであります、諸君の如き有望な新手を加へたことは、国家は多大の満足を以て諸君等を迎へられることと存します、是まで諸先生方の御言葉もありました通りに□是から先き我国は愈々多事ならむとする状態を呈して居ります、此時此際に當つて諸君の如き有力なる働き手を得たことは真に満足な訳であります、もう既に長時間來賓各位の御訓諭があり、一一骨身に堪へるやうな御言葉かありまして、諸君等も十分感謝せられたてありませう、私共の側に於きまして、亦非常に考へたことでもあります、大なる教訓を受けたことと信じて居ります、それでもう茲に管管しく申上げる必要もないかと心得ます、併し各位の御言葉に付きまして自分等も多少発明したこともありませう、又多少自分等には嗚呼かましくも、諸君等の将来を見届けるやうな役かあるやうにも心得まして、それで聊か言葉を添へて御清聴を煩はしたいと思ひます

私の考へる所に依りますと云ふと、諸君等か振翳すべき所の利器と云ふものは、諸君等は其利器に対してどう云ふ期待を有つて居らるるか知りませぬが、窃に按ずるのに其利器は刀鍛冶か刀を鍛つ、其刀の鍛ち放しのやうなものでありはせないか、其鍛ち放しの刀を持つて、非常に使ひ道になると考へて、矢鱈に之を応用される場合には大なる間違を生ずると存します、何所までも鍛ち放しであると云ふならば、それに向つて十分なる磨きと十分なる研きを与へなければならぬ次第のものたらうと思ひます兎も角も私の信します所に誤りかな

いとするならば、諸君等は是より其鍛ち放しの刀に向つて十分磨きをかけ、研きを施すと云ふことに一番努力せられると云ふことかなければならぬと思ふ、吾吾の多少経験して居る所に依りますと云ふと、従来吾吾の接触する者の中に、学校を出てから会社とか或は諸官省とかさう云ふ道道に出て、さうしてどうしたかと云ふと、どうも自分を優待して呉れない、汚い話であるか奇麗な話であるかは知らないが、手近な言葉で言ふと報酬などか少ない、或は又虐待と云ふではないけれども取扱か一杯にいかない、恰も前垂掛の、さうして鼻汁をたらして居る小僧のやうに、算盤を以つて頭を撲らぬばかしの扱ひをする、或は又人に依ると自分か多少考へたこと、十分研究したことを、会社の事業の上に於ての新規な計画として、之を一つ実行して呉れると云ふことを上役に望む、上役は冷笑を以て之を迎へる、決して採用して呉れない。一度ならず二度ならず、再三其提案を持つて行つて悉く跳付けられて仕舞ふ、かやうに彼等は人を見るの明なし、逆もこれに従事して居つても見込かないと云ふこととて、最初の所を去り、二番目の所も去り三番目の所も去つたと云ふやうなことがあつたやうに思ひます、此点は唯今土方総裁の御言葉にもあつたやうに思ひます、是等の人は由来考へが間違つて居る、彼の人達は今何をして居るかと云ふと、詰り鍛ち上げた刀を磨き、研くことをやつて居る、詰り研師の役をやつて居る、研師に向つて多大の報酬もやれぬてはありませぬか、研師に向つて其刀を振り舞はず道を聞く人もないてはありませぬか、

詰り是等の方方は自分の立場を会得しないからである、社会は斯様な有力な諸君を歓迎するてありませう、諸君は将来に對して多大の希望を繋いて居るてありませう、併ながら兎も角それは将来のことである、目下は銘銘に刀を磨いて居れば宜しいので、其外に眼を振れる余地と云ふものはない、刀磨きに報酬を余計出せ、而も其刀磨きは自分の刀を磨いて居る□それに向つて多大の報酬を呉れる訳かない、総て是等の方は其考へか違つて居るから行くへき途を失つた□先つそんな訳であるから詰り私の考へる所に依ると、暫く心を小にして小心翼翼、自分の得た利器を後世大事に磨いて、立派な刀に仕上げて行くと云ふことに専心努力せられむことを希望するのであります、其努力と云ふものは、諸君等か学校に居つて先生の講演に接し、さうして比較的無趣味な、諒解に苦しむやうな講義学理はむつかしい□諒解し易いものではない、而してそれを諒解しやうと思つて努力する、比較的無趣味なこととありますが、併し各自の得た所の利器を磨くと云ふことに至つては真に趣味津津たるものかありはしないか、即ち恰も研師か磨きつつ其切れ味を試み、益々切れ味の増すのを悦ひつつ其仕事に従事すると云ふやうな訳で、諸君は其磨きか功を奏して段段切れる味が増して行くと云ふことに注意して□大に興味を感じつつ進まれる訳なんてありませう、若し私の考へる所か正しくあれば此に於て其御覚悟になつて然るへきものと思ふ、それから次に諸君等か磨きつつある利器か漸漸其光りを放ち、光彩を放ち、さうして切れ味が増して行

くと云ふ時代か来るてありませう、其時に於て私は尚ほ一つ諸君に望んで置きたい、其光彩を放ち、切れ味を増して行くと云ふことであつたならば、諸君は一刻も早く其利器を利用して見たいと云ふ慾望の起るのは自然のことである、所かそれは十分に熟しない果物を食ふやうなものであつて甚だ危険である、此夏に當つて虎列刺と云ふやうなものが控えて居る時には大に警戒しなければならぬと同時に、斯様な軽はずみは矢張り刀劍の磨きの十分でないものを振り舞はすのと同じである、即ち刀劍が十分に磨かれた、そこで諸君が得たりかしこしと其刀劍を振り舞はす、此振り舞はすことに付ても余ほど注意をして貰はなければならぬ面白半分に振り舞はされたら堪つたものでない、最もお手柔らかに御頼み申さなければならぬのであります、所か場合に依つては御手柔らかに□ふと云ふのは済みませぬ、一步進んで□どうそ其振り舞はすことを絶対に止めて戴きたいと云ふ場合も起るそれはどう云ふ場合でありませう、即ち利器の悪用、利器の濫用であります、善用に対する悪用であります、是は世の中によく起ることあります、例も大分ある、抽象的に御話するより具体的に述べた方が宜いかと心得ますが、例を大きくして彼のカイサー ウ井ルヘルム、彼は精鋭なる所の大兵を擁して、而して此兵を動かして見たくてならぬ、遂に動かすことになつて、其動かし方に列国が注意して見ると侵略、侵略と云ふやうに諒解されることになつたから、列国も捨置くことか出来ないと云ふので其結果はどうてありませう、一敗地に塗れて

遂に事は成らず□彼の有名なる独逸帝国はぶつ倒れ、皇室も跡方を止めず、生残つた彼は僅にアレロンゲンの古城に於て月を眺めると云ふ悲惨な運命を味はなければならぬことになつたてはありませぬか、それは詰り利器の濫用、悪用と云ふことから来つたのであります、是は余り例が大き過ぎますからもつと變つた例を一つ申上げます、近頃未曾有の残酷事件として言ひ伝へられて居る彼の米屋殺し、予て習つた豚料<sup>(理)</sup>□の芸を人間に應用した、彼は豚なんかを料理して居れば世間の大喝采を博して居つたのでありませう、それを人間に應用したから実に言ひ様のない悲惨事を惹起したのであります、其悲惨事は恐らく我国に於ては前例か殆ど少ないが、外国に於ても前例か少ないと思ひます、是か詰り利器の悪用と云ふことてあります、豚殺しを豚に應用せず人間に應用した、もそつと近い例を一つ申上げます、私の知人ですが名前だけは述べませぬ、法律を学んだ人てあります、外国に留学して多年彼の地に於て法学を磨き上げて非常に苦学した人てあります、錦衣故郷に帰り、さう云ふ人であるから弥々頭角を現して人の注目を惹くことになつた、吾吾も窃に悦んで居つた、それかどうてありませう、其人か検挙された、監獄へ投り込まれた、獄窓に呻吟して居る、実に驚いたてはありませぬか、如何なる仔細あつて斯の如き紳士を獄窓へ投り込んだものてあるかと云ふと、彼の人は恐喝取財とか云ひまして、人を恐喝して財物を捲上げた、それが為に引上げられたと云ふことである、聊か法律の心得がある為に弱点を見抜くことも精し



い、それに基いて其急所を衝いて片片の手で財物を捲上げやうとしたのであります、詰り法律の知識と云ふものが其人を禍ひした、其人の側から言ふと其人に依つて法律なるものが、所謂利器なるものが濫用せられた、悪用せられたと云ふことになるのであります、真に歎はしいこととあります、斯様な事柄は幾らもある、元来法律家と云ふやつは、兎角斯う云ふことをやり勝ちである、怪しからぬ、どうも法律家に対する侮辱であります、併し此に至るのには聊かいわれ因縁がある、今日の弁護士なるものは昔は代言人と呼ばれた、其代言人に三百代言と云ふものがある、此三百代言と云ふ奴か天下を横行した時代もあつた、斯様な場合には彼は当然碌なことはやらなかつたのであります、斯の如くにして世間の信用を失つた時代がある、其情勢か今日に残つて、今日では堂堂たる弁護士、人格の高い弁護士か幾らも控えて居るに拘らず此悪声は除き去られない、詰り自分か少しばかり知つたのを悪用することか幾らもあつたらしいのであります、併し斯う云う悪用をやる、善用をしない人は必しも法律家はかりてはない、現に自然に親しみ、自然を楽しむべき農学者か矢張り悪用をした、是て見ると法律家はかりてない、一般の人達か警戒して然るへきてあります

昔我国に正宗、村正といふ刀劍師の名工がありました、是は諸君も御承知でありませう、或は正宗と云ふ銘酒た、酒と間違へる人も世間にはあるかも知れませぬが、正宗は世界的の刀劍師と云はれた人である、其正宗と村正か刀を鍛つに付て

各々覚悟か違つたと云ふことである、村正は鉄鎚を執つて何ても切れる、何でも切れると云ふことを心に念して刀劍を鍛つたさうであります之に反して正宗は治国平天下、即ち我を護り君を護り國を護ると云ふことを必死に念しつゝ刀を鍛つたと云ふことである、それが為に後年村正の刀は、何かと云ふと鞘走つて人を殺めること幾百幾千なるを知らず、世の中に忌み憚られた刀である、正宗は之に反して護身の道具として歴史の措紳か皆之を床の間に飾つて置くと云ふやうに非常に尊重せられた、斯の如く同し刀を鍛つものにも人に依つて刀に対する期待と云ふものか違ふ、刀は固より切れるのか当り前、切れない刀は薪さつぼうと一つてありまして何の役もなさない、切れないはならぬものには相違ない、けれども何ても切れると云ふ、其何てもと云ふ奴か悪い、即ち刀の悪用であります、最も危険至極のものである、世の中に憚られたのは当然のこととあります、私は諸君に望むのに此正宗の心を以てやつてお貰ひ申したいと思ふ、もう一つ、是は少し脱線しますが、或一部の外国人にも望みたいと思ふのであります、一部の外国人は□我國民を□て畏多くも好戦國民、侵略國民であると云ふことを広言して憚らぬ者かあるさうです、怪しからぬ、又其広言を聴いて、如何にもさう云ふ考へかあるかのやうな顔つきをして、矢鱈にあたりて軒を煽つて歩く者かある、怪しからぬ輩であります、後の方は最も怪しからぬ、どうか正宗村正の歴史、其刀劍の歴史、即ち我武士の歴史、武士道の魂の歴史に、少しく耳を持つて貰ひたいと思ふ

のてあります、諸君には此正宗の心を以て諸君等の利器を  
用して貰ひたいと云ふことを呉呉も望むのであります

鳥渡諸君に御祝辞を申し上げやうと云ふ訳で登壇致しまし  
たが、諸君を前に□控へて見ると、平生教場に在つて、諸君を  
前にして講演をする、其講演の残りかあつたかのやうな感し  
か起つて来る、図らず諸君の清聴を煩はすと云ふことになつ  
たのであります、長談議は禁物であらうと思ひます、然ら  
は之にて止めて置きます(拍手)

又東京地方裁判所検事正太田黒英記氏は學員を代表して左の祝  
辞を述べられたり

「閣下並諸君、本大学の第三十四回卒業式を挙行せらるるに  
当りまして、不肖私も亦之に列し席末を汚すことになりまし  
た、殊に此盛典に於て聊か祝辞を述べます機会を得ましたこ  
とは私の光榮と致す所でございます

我中央大学は、先程も学長より御話がありましたやうに、明  
治十八年の七月、英吉利法律学校と云ふ名称を以て創立せら  
れたものでございまして、其後東京法学院□それから東京法  
学□大学と為り、更に明治三十八年中と記憶しますが現今の  
校名である中央大学と改められたのでございます、又其組織  
に於きましても共同責任の維持員組織から社団法人と為り、  
更に最近に於て財団法人と改められました、創立以来三十有  
余年の間に幾多の変遷を経て今日に至つたものであると云ふ  
ことは御列席各位は御記憶の次第であります、唯私は其間  
に於て終始一貫して毫も變へられざるものか一つあると思ふ

のてございます、それは当大学の学生を養成せらるる所の御  
方針であります、承はり及びみます所では、本校を御創立にな  
りました先輩諸氏は、当時法学教育か動もすれば社会の人情  
風俗を顧みずして、徒に空理、空論に流れ、其結果却つて社  
会を荼毒する虞あることを慨嘆せられまして、力めて社会の  
實際に重きを置いて、学問の实地運用の素を養ふと云ふこと  
を目的として、本校設立の拳に出られたと云ふこととござい  
ます、其事は当時の趣意書にも明になつて居ることでありま  
して、明治三十五年かの学制革新の際に、維持員会の決議に  
なりました決議文中にも斯う云ふことか見えて居ります、即  
ち「法律経済の学は年を逐て進歩し駸駸底止する所を知らず  
故に其教授法亦務めて斬新なる理論を採取すべきは勿論なれ  
とも徒に理論の末節に拘泥して實用の大本を閉却するは現今  
□学生の大欠点にして抑も亦本院創立の主旨に背反せり云  
云」とありまして是等の点より考へますと当大学の教育上の  
御方針は、常に社会の實際と離れずして、社会の实情に密接  
して理論の研究を為し、同時に其实地運用、實際的運用に熟  
達する、斯う云ふことを趣意として学生を養成せらるるのて  
あると云ふことが、私は真に明瞭であらうと思ふのでありま  
す、而して此御方針は創立以来今日に至る迄少しも變改せら  
れた所かない、私は此御方針は本大学の本領とも申すべきも  
のであらうと考へるのでございます、而して又私共が常に悦  
ぶ所のものは、当大学の学生間の著実、穩健なる学風とござ  
います、是は容易に他に見られざる所でありまして、当大学

の特色とても申すへきものであらうと考へます□此結構なる学風は、勿論学生陶冶の任に当られました所の諸君の御人格の御感化にも依ることとこさいます。私は唯今述へました本校創立以来の御方針が其素質を成して居るものであらうと考へるのでこさいます。先程承はります所に依れば、当大学の現在の在学学生数が五千名に近く、又創立以来卒業生を出しましたことか七千以上に達して居る、真に盛んなことと申さなければならぬ、斯の如く校運の隆昌を致すに至りましたのは、固より学長<sup>(初め当)</sup>初局諸氏の御経営の頗る宜しきを得た結果であることは申す迄もないのでありますが、唯今述へました本大学の方針が最もよく社会の要求に合致したと云ふことも、其最大原因の一つに相違ないと思ふのです。さう致しまして本校に於て教を受けられました諸君の多くは、先程も学長の御話がありましたやうに何れも高等文官、司法官、弁護士、其他衆議院議員、実業家、会社員等、社会の各方面に於て重要な職に就かれまして、内地は勿論遠く朝鮮、台湾に至る迄各地に於て盛んに活躍して居られるのでこさいます。全国の各地に於て一大勢力を作つて居らるのでこさいます。是は私共の痛快事と致す所でこさいます。当大学の社会に貢献せられたこと実に偉大なものであると考へるのでこさいます。而して今又新に法律科、経済科、商科を通して三百七十有余名の新進気鋭の士を出されまして、茲に盛大なる卒業式を挙げられるのでこさいます□私は当校の出身者の一人と致しまして衷心より此盛典を祝すると同時に、本校の將

来益々隆盛を致されまして、其本領とせらるる所を弥々益々發揚せられむことを祈る次第でこさいます

尚ほ私は今回の卒業生諸君に一言したいことかこさいます。先程先輩諸君より周到なる、又痛切なる、又興味ある御話かこさいました。私は殆ど蛇足を加へる必要はこさいませぬ、唯一言今日の盛典に対して御祝辞を述べると云ふことに止めたいと思ふのでこさいます。諸君、歐洲の大戦は先程皆様より御話かありました通りに既に終りを告げまして、講和条約の調印も相済み、流血の惨事、流血の残虐は其幕を閉ちまして、各地に平和歎喜の声を聞くに至つたのでこさいます。是は真に御同慶のことと存するのでこさいます。併ながら静かに考へますと此大戦争は世界人類の思想上に非常なる変化を持ち来して居るのでこさいます其結果社会の組織、社会の秩序に根本的動揺を来さむとする傾向を呈して居るのでこさいます。此勢ひを以て進みましたならば私は世界は混乱の状態に陥りはしないかと云ふことを気支ふ者でこさいます。是は勿論、或は世界の人類か茲に一大進展を遂げむとする道程に於きまして偶々起つたる一つの現象であるかも存しませぬ、併ながら兎に角現時の状勢は寒心に堪へさることとこさいます。我國民も亦世界の一部に國を成して居りまして、他と密切なる交渉を有して居ります以上は、世界の大勢に独り超然たることは出来ないと思ひます。それで唯今御話致しましたやうな思想上の影響を被ることも避け難いことたらうと思ふのでこさいます。言葉を換へて申しますれば世界の各地

に侵入して各社会を攪乱せむとしつつある所の各種の不健全なる思想の襲来することは到底避け難いことであらうと思ふのでございます、真に戦慄すべきことでございます、諸君は多年本校に蛍雪の功を積まれまして、即ち本校の本領とせられます所々の教育上の方針に□つて、健全な新知識を養成せられ、又本校の特色とせられる所の学風に依つて穩健なる思想を養成せられ、而して今や校門を出て実社会に臨まれむとするのでございます、社会は諸君方のやうな健全なる知識と穩健なる思想とを養ふて、而も新進氣鋭の人の出陣を待つこと甚だ急なりと思ふのでございます、邦家の前途一に皆様方の努力に俟たなければならぬと思ふのでございます、是か私の今日多大の期待を以て諸君の首途を祝する所以でございます、どうか皆様方も深く思ひを茲に致されまして、邦家の為め御自重あらむことを希望する次第でございます、聊か所懐を述へて祝辞と致します(拍手)

以上を以て卒業の式を終り別室に於て来賓並に卒業生諸氏に対し菓茶の饗応あり其卒業生諸氏か十二分の歡を尽して校門を顧みつつ辞去したるは六時を過ぐ因に当日出席ありたるは男爵法学博士穂積陳重、元田肇、杉浦重剛、春木花井青山大場桑田諸博士を始め来賓並に學員諸氏百数十名に上り頗る盛況なりし

○卒業者姓名左の如し(イロハ順)

法科大学部

愛媛 今村卓之助 栃木 石川 大作 静岡 稲野 守  
 広島 石畑 一登 広島 入野梅次郎 岡山 原田 純平

大分	十時 赴夫	支那	陳 參一	支那	林 文琴
栃木	大笹 一雄	愛媛	渡部 英夫	青森	金崎 政雄
岩手	吉田政之助	群馬	田島 薰	和歌山	中村 董
茨城	宇野 富	東京	久保田純一	東京	山田述之助
岐阜	松原 正義	福島	眞木 桓	愛媛	馬越 旺輔
静岡	小林 芳夫	鹿嶋	始良 清治	千葉	青木 重司
大分	坂本 <small>(本)</small> 卓爾	福岡	佐々 成好	福島	齋田 信夫
岩手	菊地 四郎	栃木	北島義三郎	秋田	三井健太郎
京都	三善 執彦	富山	水上 尚信	福岡	水野 廣治
長野	宮本 基	茨城	椎名 照親	東京	久松 逸馬
山梨	望月 福德	新潟	關 憲治	東京	鈴木 政吉
秋田	須磨彌吉郎				
法科専門部					
福岡	石谷 又平	鹿嶋	岩井 貞雄	岡山	井上 一夫
北海道	入山 寔知	東京	今里延次郎	山梨	飯田 昌進
佐賀	岩永 勇弑	埼玉	岩澤 孝三	北海道	岩城 定春
大阪	石田 實	千葉	生貝 隆	三重	生駒定三郎
大分	今泉 富吉	大阪	今西 貞夫	茨城	伊藤篤太郎
茨城	犬丸清太郎	福島	石川 正直	愛媛	一色 信一
千葉	伊藤 一朗	千葉	石尾富三郎	東京	石井 信武
兵庫	今宿新太郎	茨城	市川 俊次	石川	濱中助太郎
香川	濱野 良一	群馬	長谷川鎮雄	愛知	早川 濱一
高知	濱口 重利	福井	春田 定雄	東京	萩原 忠則
広島	島中不二雄	支那	潘 培敏	広島	二反田眞一

大分	西村喜代造	山形	西方利馬	埼玉	堀口良雄	長崎	中村俊一郎	山梨	中込富造	埼玉	向山浩三
香川	別枝專太郎	山梨	戸澤正	愛媛	徳見三吉	青森	上野昇三	佐賀	野中喬	大分	野尻収
千葉	戸田英雄	静岡	鳥井英一郎	高知	豊島竹次	埼玉	野々宮莊治	支那	農一葦	長野	草野伊太郎
茨城	所恭之介	神奈川	近津文吉	広島	茶谷信太郎	茨城	栗田酉之介	群馬	栗原武貞	宮城	黒澤藤馬
宮城	千葉長	宮城	千葉隆	茨城	大久保一郎	北海道	熊谷要藏	宮城	熊谷榮三郎	福岡	久保田光三郎
埼玉	大照常弘	福岡	大石榮	埼玉	大塚武	宮崎	久保田稔	千葉	矢部善夫	東京	山口喜三太
岡山	岡竹隆一	新潟	大川博	千葉	小倉徳太郎	福島	山田廣治	東京	山田實	栃木	山崎十五
山口	大盛盛弑	山梨	岡喜幸	佐賀	太田四郎	兵庫	山田卯太郎	福島	卷一郎	山形	松田吉之助
山形	大島雄四郎	千葉	大野傳藏	福島	小野寺愛治	鹿島	松元泰助	長野	舞原藤藏	東京	松島秀男
愛媛	渡部和雄	愛媛	渡邊和四郎	東京	脇田久勝	東京	松田松太郎	東京	藤倉留吉	石川	藤野衛
東京	糟谷淨	東京	川野啓藏	宮崎	河井田正久	広島	小脇芳一	東京	小島藤一郎	千葉	小林順次
広島	河野通一	東京	狩野力治	岡山	笠原房夫	福岡	古賀徳次	長野	兒玉正五郎	茨城	小關伊三郎
千葉	數原武男	東京	加藤兵衛	広島	片田省三	広島	兒玉義春	北海道	近藤吉三郎	愛知	江川六兵衛
福島	河原田隆吉	愛媛	嘉村清一	茨城	吉原七三郎	千葉	江波戸文夫	滋賀	寺田淳藏	愛媛	安藤源造
神奈川	横山親造	群馬	吉澤喜作	茨城	米倉新藏	山口	有田國介	山形	青木仁藏	東京	甘利政盛
茨城	高橋静一	三重	瀧見篤	沖繩	高嶺方美	北海道	相田直吉	山形	東洋治郎	大分	綾部哲四郎
神奈川	多田慶次郎	京都	田中恒治	秋田	高橋隆二	鳥取	安達幸衛	茨城	佐野有明	兵庫	佐々木重夫
山口	田中悦之助	兵庫	田中善次郎	愛知	竹内和平	山形	佐藤誠一	秋田	佐藤正藏	愛媛	堺始男
香川	田所恒一	長野	田島清太	神奈川	竹内英	新潟	齋藤岩次郎	東京	相良一雄	福島	齋藤義恵
支那	曾傳三	大分	宗尚喜	朝鮮	宋必滿	愛媛	佐藤一逸	高知	佐竹晴記	滋賀	西條要助
岡山	園部新吾	支那	莊善昶	群馬	津田辰造	静岡	佐藤健助	山梨	佐藤鎌	茨城	坂吉兵衛
富山	土田權二	福島	角田隆治	熊本	中村卯四郎	徳島	齋藤義明	支那	蔡振東	茨城	菊野景丸
長崎	長與謹三	広島	中島清三	宮崎	中島悟	徳島	北西兵次郎	千葉	君塚春吉	佐賀	北村武治
愛知	永田國光	沖繩	仲原善賢	愛知	内藤秀雄	福岡	行實榮太郎	和歌山	南垣内藤次郎	群馬	宮部二郎

愛媛	三ツ石八壽男	岡山	皆木 甫	東京	宮野養之助	茨城	大友 兼夫	支那	王 世傑	東京	金山 藤吉
京都	宮崎猪之助	千葉	三上 良二	東京	三浦重太郎	広島	川本圓次郎	東京	河原 秀雄	岩手	笠神志都延
熊本	三村 五郎	福岡	柴田 昇	広島	滋野 清登	滋賀	川合 久也	支那	顏 瑜	埼玉	加藤 佳吾
岩手	下飯坂 元	新潟	島名 建	佐賀	島崎 武夫	東京	加藤 左門	島根	神田 實	新潟	多賀辰三郎
神奈川	鹽瀨 三郎	秋田	白瀨潤次郎	三重	清水 繁一	東京	高木健三郎	広島	竹本 古	愛媛	玉井 茂
三重	城者喜三松	福岡	新原太十郎	新潟	鹽崎重太郎	東京	武田 重雄	栃木	竹内勝次郎	東京	曾根原光太郎
福岡	樋口 常彌	静岡	平岡 乙彦	山形	樋口朝次郎	神奈川	根本 幸八	支那	孫 朱坤	大分	名武 正一
石川	久田 久良	大分	平林 四郎	広島	持田 諫	島根	成相 淑	茨城	中島 眞	東京	中村 專助
長崎	森田住三郎	京都	森垣 寅藏	岡山	守屋 歳久	新潟	中村善太郎	岩手	内澤文太郎	新潟	桑原常次郎
支那	孟 藹人	宮崎	清家 茂毅	富山	瀬川 幸作	長野	久保田五郎	福岡	松尾 友喜	山口	藤村 義正
朝鮮	金 志健	愛知	鈴木 功	福岡	住吉 武夫	島根	福岡 松十	茨城	福田清次郎	山形	藤田 光三
千葉	鈴木 信海	秋田	鈴木 由彌	東京	鈴木 邦恭	新潟	近田助治郎	兵庫	小谷 隆二	東京	小谷 誠一
経済科大学部											
茨城	伊佐山 勇	広島	花本菊次郎	新潟	近江 榮司	東京	青山 信一	岡山	青木 若治	東京	齋藤健次郎
広島	片山 金章	秋田	加賀谷金作	岐阜	瀧本佐一郎	東京	酒井 政暉	岩手	佐藤甚治郎	山口	三戸 義一
秋田	山田 市郎	山形	佐藤慶治郎	愛知	杉浦 末吉	福井	箕田善太郎	北海道	三浦 悦郎	鹿児島	柴山源次郎
東京	鈴木新之介										
経済科専門部											
佐賀	池田 兵二	佐賀	岩永 啓	東京	五十嵐恵次郎	商科大学部					
岐阜	石田 眞三	広島	原田 勝	島根	西尾 顯	宮城	一條 泰助	東京	岩井 正順	岡山	鳩谷 淑人
富山	堀 一徳	東京	細海榮治郎	愛知	富田謙太郎	東京	遠山芳之助	福岡	戸川 正夫	栃木	生出 弘視
大分	富田 耕造	東京	土井内周二	支那	張 景銘	佐賀	大坪 信彦	佐賀	大串 卓司	東京	大林 正夫
支那	李 啓宇	静岡	太田 亮一	東京	小倉 益市	山形	渡邊 鐵次	石川	覺本 覺治	東京	加納 柳造
岐阜	大脇 一二	北海道	小鹿吉太郎	福岡	大石 重威	青森	荻田 才吉	群馬	吉田 義雄	東京	芳林鐵次郎

東京 横川幸之助 岡山 中原 正己 鳥取 永濱 亮一

法科専門部第二級

福岡 中村 嶽男 静岡 中田強一郎 福岡 中村 義麿

給費生 川村彌一郎 繁本國武 圓山多作 久保順一

熊本 村上 嵩 神奈川 野村喜代次 東京 野寄 政明

森 信一

東京 野村 貞雄 宮城 熊谷 幸輔 東京 窪田哲次郎

経済科専門部第二級

石川 雲田 一雄 青森 山中 秀一 鳥取 山本 次郎

特待生 大井豊治

岡山 榎井 寛 広島 小松完三郎 静岡 天野 謙

経済科専門部第二級

愛知 櫻木 芳園 大分 三浦 四郎 大分 清水 彰

佐伯満一 石黒信一

群馬 清水 嘉吉 愛媛 森 深一

商科専門部第二級

商科専門部

給費生 北村一男 神原 泰 若林次郎

東京 吉田 金司 長野 内藤 安 愛媛 船本 濤治

法科大学部第一級

優等生姓名左の如し

木原圓次

法科大学部第三級

法科専門部第一級

(磨) 須磨彌吉郎

特待生 宿谷文三 特待生 矢島修五郎 小久保義憲

法科専門部第三級

國島貞一 牛山 毅 上田勤四郎

特別賞品受領者 高嶺方美 同 仲原善賢 同 佐藤誠一

経済科大学部第一級

佐竹晴記 石田 實

金子盛國

経済科大学部第三級

経済科専門部第一級

特別賞品受領者 山田市郎 杉浦末吉 花本菊次郎

特待生 熊井光男 柴田 武

片山金章

商科大学部第一級

経済科専門部第三級

特待生 辻村 健 柴山道生

特別賞品受領者 富田謙太郎 多賀辰三郎 茂木 智

商科専門部第一級

岩永 啓 川合久也

給費生 大川善之助

商科専門部第三級

大学予科第一部第二級

吉田金司

特待生 田村角太郎 香川源一 千葉卯源太

大学予科第二部第二級

小松原享

大学予科第一部第一級

給費生 濱中英吉 給費生 山下東太郎 田島敏二郎

久保與吉 小山國雄

実業同窓会特別賞品受領者

商科専門部第三級 吉田金司

商科専門部第二級 北村一男

商科専門部第一級 大川善之助

○組織変更の認可 予て出願中の社団法人を解散して財団法人を設立することは去月主務省の認可を得て登記を了し理事には岡野学長及馬場愿治、馬場鉄一の二氏監事には花井卓藏氏就任したり

○基金募集事業 寄附金は各位の深厚なる同情と委員諸君の熱心なる尽力とに依り其後続続申込に接し前号所掲以後の分左の如し(括弧内維持基金共とは創立三十年維持基金として申込ありたる分と今回の基金寄附申込額とを併算したるものにして何等の記入なきものは今回の基金のみの寄附申込額とす)

一金参千円 (維持基金共) 石井 謹吾君  
一金千貳百円 (同上) 稲田周之助君  
一金五拾円 石野 頼由君  
一金五拾円 今村 佐七君  
一金壹百円 西谷 清雄君  
一金六百円 朴 勝彬君

一金四百五拾円 (維持基金共)

一金参百参拾円 (同上)

一金壹百貳拾円

一金貳拾円

一金六百円

一金壹百円

一金六拾円

一金六百円

一金五百円

一金四百五円 (維持基金共)

一金四百円

一金参百参拾円 (維持基金共)

一金貳百貳拾五円 (同上)

一金貳百円

一金貳百円

一金貳百円 (維持基金共)

一金壹百円 (維持基金共)

一金五拾円

一金五千元

一金五拾円

一金四百円 (維持基金共)

一金貳百円

一金貳百円

一金貳百円

本田 常吉君

細谷 五郎君

本田典太郎君

堀田 貞藏君

豊島 良昌君

外山 福男君

豊田才次郎君

李 升雨君

小野 廉君

小栗盛太郎君

岡林 猛君

大知新太郎君

大澤 清高君

大西 利夫君

大谷 彰一君

岡 辨良君

小野龜次郎君

岡見 清直君

脇田 勇君

渡部鐵太郎君

川田 久信君

川井金一郎君

勝木勘三郎君

鯉澤榮三郎君



一金壹百円	神野平太郎君	一金貳百円 (維持基金共)	上田 貞藏君
一金五百円	吉村幹三郎君	一金五拾円	宇佐見盛光君
一金貳百円	吉野豊次郎君	一金五百円 (維持基金共)	楠 久接君
一金貳百円	吉川 等君	一金參百円	桑島 勇君
一金五拾円	横田 好實君	一金貳百円	黒木榮太郎君
一金五百円	田坂佐三郎君	一金六百元	山之内兵十郎君
一金五百円	玉木 彌市君	一金參百円 (維持基金共)	柳澤愼之助君
一金參百七拾五円 (維持基金共)	竹村 昌計君	一金參百円	山口彌三郎君
一金參百円 (同上)	谷 忠行君	一金貳百円 (維持基金共)	柳田宗一郎君
一金貳百円 (同上)	谷村 唯一君	一金參百円 (同上)	松森 靈運君
一金貳百円 (同上)	瀧森 友吉君	一金貳百貳拾五円 (同上)	丸山 熊八君
一金五拾円	竹下 順一君	一金貳百貳拾五円 (同上)	榊谷 益藏君
一金參拾円	田中 唯七君	一金貳百円 (同上)	松本 伊織君
一金貳千円 (維持基金共)	土屋理喜治君	一金百五拾円 (同上)	松隈 昌隆君
一金壹百円 (同上)	續 信一君	一金六拾円	正岡 義光君
一金七拾貳円	根村 俊彌君	一金壹万円	二神 駿吉君
一金七百元 (維持基金共)	中野勇治郎君	一金參百參拾円	藤村健一郎君
一金參百円	中村 定君	一金參百円 (維持基金共)	藤田貞次郎君
一金參百円 (維持基金共)	長岡 熊雄君	一金貳百円 (同上)	藤谷 久六君
一金參百円 (同上)	長島 八郎君	一金壹百円	古本 春藏君
一金壹千円	村田不二三君	一金四百円	小島愛三郎君
一金壹百貳拾円 (維持基金共)	村田次之吉君	一金五拾円	後藤 積君
一金壹百円	武藏 康造君	一金參千円 (維持基金共)	永瀧 久吉君
一金五拾円	村上彌太郎君	一金七百五拾円	安達元之助君

一金四百式拾円 (維持基金共)	天野 武雄君	一金百六拾五円 (維持基金共)	水島 房吉君
一金參百六拾円 (同上)	赤井 定義君	一金六百元	志水小一郎君
一金參百參拾円	淺沼彦一郎君	一金參百元	下村 逸進君
一金百式拾円 (維持基金共)	安立 守成君	一金式百元	柴田甲四郎君
一金六拾円	麻生 和輔君	一金百式拾円 (維持基金共)	設樂 義男君
一金五拾円	新 情二君	一金壹百元	城谷 一誠君
一金式千円 (維持基金共)	佐藤 正之君	一金六拾円	白尾 清次君
一金千五百円	齋藤 正毅君	一金壹百元	東 忠藏君
一金參百五拾円 (維持基金共)	佐藤 三吾君	一金六拾円	平田泰次郎君
一金參百元	佐藤 俊龍君	一金參百元 (維持基金共)	諸留 勇助君
一金參百元	佐藤太眞伎君	一金式百元	森田 久忠君
一金式百元	三宮 亦男君	一金壹百元	森田愛次郎君
一金式百元	佐藤 忠雄君	一金式百五拾円	砂田精次郎君
一金式百元	佐々木精太郎君	一金式百五拾円	杉本善次郎君
一金壹百元	齋藤豊之進君	一金式百元	須賀 正俊君
一金壹百元	齋藤 豊君	一金百八円	鈴木 好清君
一金六拾円	佐々木鐵藏君	一金壹百元	鈴木 功君
一金五百円	清輔爲太郎君		(以下次号)
一金參百元 (維持基金共)	木寺 亨重君	○維持基金の払込ありたる氏名左の如し尚ほ前回に藤井辰太郎	
一金參百元 (同上)	木村 精一君	君とあるは廣井辰太郎君の誤りに付茲に是正す	
一金式百五拾円	桐谷 圓藏君	金五円 (一回分)	石野 頼由君
一金參百元 (維持基金共)	宮澤 武七君	金壹円 (卅一回分)	稻垣宗次郎君
一金式百拾式円 (同上)	峰松茂三郎君	金五円 (卅九、四十回分)	生田清三郎君
一金百八拾円	水町 新三君	金壹円 (廿五、六回分)	石川 吉衛君

金貳円 (自六十三回至六十六回分)	石谷傳市郎君	金貳百円 (卅七回分)	堀江專一郎君
金壹円五拾銭 (卅五回分)	井上 剛一君	金貳円五拾銭 (廿八回分)	細谷智之介君
金貳円 (卅八回分)	伊藤久次郎君	金五拾銭 (十回分)	本宮 一男君
金拾円 (三回分)	岩本麻次郎君	金貳拾円 (完)	堀田 貞藏君
金拾貳円 (自卅七回至四十八回分)	飯沼鬼一郎君	金壹円 (五十七、八回分)	富田勇太郎君
金拾円 (卅八、九回分)	稻田周之助君	金六円 (自卅七回至四十二回分)	鳥山 利孫君
金壹円 (卅五回分)	今田鎌太郎君	金五拾銭 (廿六回分)	戸田 承君
金四円 (卅八回分)	稻澤庄次郎君	金壹円 (廿七回分)	徳田 直吉君
金六円 (自卅五回至卅八回分)	伊藤 浩藏君	金五円 (二回分)	豊島 良昌君
金五円 (廿八回分)	石原毛登馬君	金壹円 (卅四回分)	東條 正平君
金五拾円 (完)	今村 佐七君	金貳円 (卅一回分)	富田祐太郎君
金壹千円 (四十九回分)	花井 卓藏君	金五拾銭 (卅二回分)	戸石 正憲君
金貳円 (卅五、六回分)	葉山萬次郎君	金壹円 (廿二回分)	戸倉惣太郎君
金壹円 (六十七、八回分)	林 茂增君	金五円 (自卅一回至卅五回分)	千葉 公賀君
金貳円 (十一、二回分)	林 安宅君	金壹円 (四十一、二回分)	大島恒次郎君
金貳円 (卅九、四十回分)	服部 豊吉君	金壹円 (廿三回分)	岡田 實磨君
金拾円 (廿五、六回分)	馬場 愿治君	金參円五拾銭 (卅六回分)	大川 清一君
金七円 (卅四、五回分)	林 頼三郎君	金拾貳円九拾五銭 (自卅四回至四十回分)	小栗盛太郎君
金六円 (自八十三回至八十六回分)	西川 一男君	金五円九拾五銭 (自卅四回至四十回分)	大澤 清高君
金五円 (一回分)	西谷 清雄君	金五拾銭 (廿八回分)	岡崎 一治君
金壹円 (卅六、七回分)	堀 竹雄君	金參円五拾銭 (廿三回分)	岡田宇之助君
金壹円 (卅一回分)	細谷 五郎君	金壹円 (卅五回分)	小野政太郎君
金壹円 (卅四、五回分)	星野 太郎君	金壹円 (卅五回分)	大内省三郎君
金參円 (自卅六回至卅八回分)	本田典太郎君	金五拾銭 (十八回分)	岡 辨良君

金貳円五拾錢 (卅六回分)	尾崎 利中君	金四円 (廿四、五回分)	高野兵太郎君
金貳円 (一回分)	大西 利夫君	金百八拾貳円 (卅七回分)	瀧森 友吉君
金五拾錢 (十六回分)	小野龜次郎君	金貳円 (自十五回至十八回分)	高木 三郎君
金四拾貳錢 (一回分)	岡見 正直君	金壹円五拾錢 (廿七回分)	田崎 慶一君
金參円參拾四錢 (一回分)	岡林 猛君	金貳円五拾錢 (廿八回分)	高柳覺太郎君
金壹円 (卅六、七回分)	鷺見龜五郎君	金參百円 (卅一回分)	武田 明君
金六円 (自卅七回至四十八回分)	和田 杠治君	金五百七拾円 (四十七回分)	高窪喜八郎君
金壹円 (卅六、七回分)	片山 寛君	金五拾錢 (十四回分)	太宰 孝吉君
金壹円 (卅七、八回分)	鹿野清次郎君	金壹円 (卅五回分)	副島寅三郎君
金貳円 (卅五、六回分)	金澤 卯一君	金五円 (自六回至十五回分)	續 信一君
金貳円 (自六十五回至六十八回分)	川村 貫治君	金五拾錢 (卅八回分)	筒井 雪郎君
金貳円 (卅九、四十回分)	川鍋 鐵馬君	金貳円 (卅五、六回分)	根津 千治君
金壹円 (卅五回分)	金子保次郎君	金壹円 (卅回分)	生井 耕造君
金貳円五拾錢 (卅四回分)	櫻谷 政鶴君	金壹円 (卅六、七回分)	奈佐 忠行君
金貳円五拾錢 (卅五回分)	上内恒三郎君	金參円 (廿七、八回分)	中村 進午君
金壹円 (卅六回分)	加藤 一郎君	金壹円 (卅九、四十回分)	成瀬仁喜太君
金拾七円五拾錢 (自卅四回至四十回分)	河野 秀男君	金貳円 (卅五、六回分)	内藤諒太郎君
金貳拾五円 (二回分)	横田 好實君	金壹円 (廿四回分)	中川眞太郎君
金拾円 (自五十二回至五十五回分)	横田 秀雄君	金五円 (四十三回分)	長岡 熊雄君
金五拾錢 (四十三回分)	頼信藤四郎君	金拾貳円 (自十三回至卅六回分)	中口 末松君
金貳円五拾錢 (卅五回分)	吉益 俊次君	金五拾錢 (廿八回分)	中島 正憲君
金貳円 (十八、九回分)	吉田 久君	金五拾錢 (廿回分)	中村 淑人君
金五円 (卅一、二回分)	武田鬼十郎君	金五円 (一、二回分)	中村 定君
金壹円 (一回分)	武川 清次君	金壹円 (卅六、七回分)	村田 祐治君

金六円 (自卅七回至四十二回分)	村岡禎二郎君	金六円 (自一回至三回分)	古本 春藏君
金五拾銭 (卅六回分)	上田 貞藏君	金七円 (一回分)	小島愛三郎君
金参円 (四十二、三回分)	栗本 武三君	金壹円 (卅九、四十回分)	小菅純三郎君
金貳円 (卅、卅一回分)	國枝 鎌三君	金壹円五十銭 (十四回分)	小菅 寅吉君
金壹円 (廿六回分)	黒田 穰君	金壹円 (廿五回分)	五味 逸平君
金五円 (四十二、三回分)	山崎林太郎君	金壹千貳百五十円 (二回分)	小松 林藏君
金壹円 (十七回分)	柳澤愼之助君	金参円 (卅、卅一回分)	遠藤 源六君
金貳円 (卅三、四回分)	柳川 勝二君	金貳円 (卅、卅一回分)	遠藤 武次君
金壹円 (卅九、四十回分)	山口 貞昌君	金貳円五十銭 (卅七回分)	手代木佑壽君
金五円 (卅四回分)	安田勝次郎君	金参円 (卅四、五回分)	阿部文二郎君
金六円 (自六十一回至七十二回分)	山口 正毅君	金壹円 (卅九、四十回分)	浅井 金吾君
金壹万円 (二回分)	山下龜三郎君	金貳円五十銭 (十四回分)	姉齒 松平君
金壹円 (卅七、八回分)	山口 鍵太君	金参円 (自卅七回至四十二回分)	會澤 茂君
金壹円五十銭 (卅五回分)	山田 三郎君	金拾円 (一回分)	東 忠藏君
金五拾銭 (四十回分)	柳田宗一郎君	金貳円 (卅四回分)	赤井 定義君
金壹百円 (一回分)	山内兵十郎君	金貳円五十銭 (廿八回分)	東兵右衛門君
金壹円 (卅五、六回分)	松浦與三左衛門君	金壹円 (卅三、四回分)	坂本 萬作君
金貳円 (十六、七回分)	前田勝三郎君	金壹円 (五十五、六回分)	佐々木清綱君
金五拾銭 (卅二回分)	眞弓正次郎君	金拾八円 (自卅七回至四十八回分)	佐伯 彪君
金四円 (十一、二回分)	松隈 昌隆君	金壹円 (卅五回分)	齋藤庄三郎君
金五円九拾五銭 (自卅四回至四十回分)	榑谷 益藏君	金貳円 (卅九回分)	佐藤 章次君
金拾五円 (七回分)	松森 靈運君	金壹円 (廿六回分)	佐々木佐吉郎君
金壹円 (卅七回分)	藤岡 大英君	金拾円 (一回分)	佐々木精太郎君
金参百円 (十一回分)	藤本徳之進君	金貳円 (十、十一回分)	木村競次郎君

金貳円 (卅八、九回分)	木戸 梅藏君	金壹円 (廿六回分)	森 源作君
金七円 (自卅四回至四十回分)	木村 精一君	金壹円 (卅六、七回分)	關矢 恕一君
金五拾錢 (卅四回分)	木付 綱磨君	金壹円 (卅六、七回分)	清田龍之助君
金五拾錢 (卅四回分)	木村 壽平君	金四円 (卅九、四十回分)	杉坂 實君
金五拾錢 (卅六回分)	三浦吉兵衛君	金壹円 (廿六回分)	鈴江秀太郎君
金貳円五拾錢 (卅六回分)	蕨和藤次郎君	金壹円 (卅六回分)	杉原丈太郎君
金貳円 (廿七、八回分)	三橋 久美君	金八円六拾錢 (一、二回分)	杉本善次郎君
金參円五拾錢 (自卅四至四十回分)	水島 房吉君	金貳円 (一回分)	砂田精次郎君
金壹円 (廿八回分)	宮澤要治郎君		(以下次号)
金貳円 (八十一、二回分)	峯松茂三郎君		
金壹円 (廿七回分)	水野 博徳君		
金五円 (四十三回分)	宮地 正彰君		
金參円 (一回分)	水町 新三君		
金參円 (卅四、五回分)	島田 鐵吉君		
金五円 (卅四回分)	白倉 吉朗君		
金壹円 (卅四回分)	重藤 幹一君		
金五拾錢 (廿七回分)	島野 金吾君		
金貳円五拾錢 (廿八回分)	白鳥保五郎君		
金壹円五拾錢 (十二回分)	重信喜太郎君		
金五円 (卅四、五回分)	廣井辰太郎君		
金貳円 (卅四、五回分)	平山 勘次君		
金四円 (廿六、七回分)	平尾 賢治君		
金壹円 (四十四、五回分)	平塚 均君		
金貳円 (廿九回分)	森 彦逸君		